

「カソウスキ」という無欲さ

総合科学教育部地域科学専攻

（博士後期課程）一年

村田 真実

津村記久子の『カソウスキの行方』を読んだ。彼女の作品を読むのはこれが初めてではない。彼女の処女作『君は永遠にそいつらより若い』であった。私は彼女の書くものなら何でも好きになるだろうと直感したが、それ以来、『カソウスキの行方』に辿り着くまでに二年の時間を要した。『カソウスキの行方』は二〇〇八年に発表された作品で芥川賞候補にも挙げたが、私がこの作品に触れることになったのは二〇一〇年、話題も下火となり消えてしまった頃だった。故に私は外聞も偏見もないまま、この作品を手にとることが出来た。その感想を、今から書こうと思う。

「カソウスキ」とはなんだろう。カワウソのような小動物のことだろうか。それとも、

フイギュアスケーターのガチンスキーのような、ロシア人の名前だろうか。読む前に様々な思いを巡らせたキーワード兼表題であるが、本文の中での意味は「仮想好き」、つまり「好きになった」ということを仮定してみる。というものである。小市民的な主人公イリエは変わりばえのない毎日を淡々と生きていく。左遷され、閉鎖予定の倉庫の中で、最低限の仕事をごなし、必ず定時に帰る。そんな日常の中でふと思いつき、実行したのが「カソウスキー」であった。同僚の森川を好きになつたと仮想し、仕事へのモチベーションをあげようという何とも無欲な思い付きである。「カソウスキー」は、彼女の日常を少しずつ変えていった。よくある作品なら「カソウスキー」はみるみるうちに「ホントウニスキー」という現象に変わるだろう。しかし、この作品は「カソウスキー」をぼんやりと描くばかりで、それがどこに辿り着くのかは教えてくれない。きつと、イリエ自身もその行方は知ら

ないのだろう。以前は貴種流離譚のようなダイナミックな物語や、ファンタジー、SFなどが好きだった。しかし、最近の研究に追われて遠くの世界に逃避する余裕がない。小市民が描かれて、いる、現実と少しだけ違う「カソウ」にしか浸れない。そんな私にとって、「カソウスキの行方』は絶好の癒しであった。小説を読んでいる、そう思えたのは、彼女の作品が初めてである。研究をしていると、切実な孤独感と無力感に襲われることがある。この作品はそんな心を癒してくれた。主人公のありふれた日常が、小さなルールの適用で少しずつ変わった。歩いていく。そのゆったりとした速度と主人公の無欲さが心地よいのである。イリエは無自覚にも、自分と同じく多くを望まない人と群れたがっていた。同類に触れることに癒しを求めていた。だから、同類であると思ってい

た森川が、実は子どもを欲しがっていたと知ったとき、ショックを受けたのだ。私も同じ

で、多くを望まないイリエと群れたかったの
かも知れない。

本はときどきこうして「カソウ」の中で孤
独を癒してくれる。だから本を読むのである。